

日本の屋根——“カラーベスト” 60年の歩み、これからの夢。

竹原義二 [無有建築工房] × 木村均 [ケイミュー 代表取締役 社長]



竹原義二 [たけはら・よしじ]

1948年徳島県生まれ。建築家石井修氏に師事した後、'78年無有建築工房設立。2000～'13年大阪市立大学大学院生活科学研究科教授。'15～'19年摂南大学理工学部建築学科教授。現在、神戸芸術工科大学環境デザイン学科客員教授。日本建築学会賞教育賞・村野藤吾賞・都市住宅学会業績賞・こども環境学会賞など受賞歴多数。近年は幼稚園・保育所・障がい者福祉施設など、住まいの設計を原点に人が活き活きと暮らす空間づくりを追求している

木村均 [きむら・ひとし]

1962年大阪府生まれ。'86年立命館大学経済学部卒業、同年久保田鉄工(現クボタ)入社。2016年ケイミュー執行役員、'18年ケイミュー代表取締役 社長就任



竹原義二

木村均



「グランネクスト シンプル」の「グラスブラック」で仕上げた木造の切妻屋根。「カラーベスト」は昭和のノスタルジックな雰囲気表現しているのに対して、「グランネクスト シンプル」は現代でシャープな雰囲気を醸し出している。「グランネクスト シンプル」の表面はマットで、微細な凹凸があるため、光が当たるとほどよい光と影のコントラストが生まれる

編集制作＝ 写真 野口 謙 人物写真＝平林克己 デザイン＝ThereThere

たようです。しかしながら、発売当初の約10年間は、売上があまり芳しくなかった、というのが実情でした。「カラーベスト」の技術的な利点を、消費者はもろろん、設計者・施工者になかなか理解してもらえなかったからです。そこで、自前で制作したPR動画の上映会や住宅建材スクールを実施。施工方法を広めました。同スクールを受講した人は現在までに、累計4万人にも上ります。

生産体制の充実にも注力しました。小田原工場(1960年)と滋賀工場(1973年)で量産を開始し、安定的な供給体制が整いました。大手住宅会社での採用も後押しとなり、結果として、「カラーベスト」は1970年代に入っ

※1 ケイミューは2003年12月に設立された外装建材の大手メーカーで、クボタと松下電工(現パナソニック)の住宅外装建材部門が事業統合したことにより誕生した

て一気に普及。日本の街並みのなかで大きな存在感を放つようになりました。**竹原** しかしながら、住宅の大量生産時代は1990年代に終焉を迎え、カラーベストを取り巻く環境も大きく変化していると思います。私自身も、若いころ

よりはカラーベスト」を使う頻度は減っています。その理由は、素材の経年変化による美しさをより重視するようになり、天然素材を多用するようになったから。そういうえば、若い世代の建築家はあまり、「カラーベスト」を使用していないらしいのですが、その原因は何だと考えられていますか？**木村** 1つ目は、商品として一般化してしまっ

※2 米国の建築家チャールズ・ムーアが1965年に設計した週末用のコンドミニアム。カリフォルニアの海岸近くに立地する勾配屋根の木造建築で、外壁には耐久性の高い地産のレッドシダーが用いられている

本における屋根材は、時代とともに様変わりしてきました。中世までは茅が主流。しかし、近世以降の都市化で火災が頻発するようになってからは、不燃性のある陶器瓦へと移行しました。ですが、大正時代(1923年)に関東大震災が発生。重い陶器瓦を積んだ木造建築の多くが倒壊し、その代替材料として軽量のトタン(金属)が台頭しました。しかし、トタンはさびやすく、耐久性に乏しい。そんななか、戦後の高度経済成長期に登場したのが、セメントを主成分とする化粧スレートでした。ケイミューさんの前身であるクボタさんが日本で実用化したのが1960年と聞いています^{※1}。

瓦屋根とは異なり、屋根工事を乾式工法で完結できるので施工性にも優れていました。当社はこれを製品化し、「カラーベスト」として販売を開始したのです。**竹原** 建築家の視点で評価すると、当時、「カラーベスト」はそれまでになかった新しい素材。防水性や耐久性といった観点から、最初は使うのに勇気が要りました。しかし、木目の模様やギザギザの水切部が醸し出すよい意味で野暮ったい雰囲気と、1枚1枚を重ね合わせて大きな面をつくる意匠、日の光が当たるとほどよく現れる陰影が、見る者の目を楽しませてくれる素材だと感じました。ちょうど米国の名建築として知られる「シーランチ・コンドミニアム」(1965年)^{※2}に似たような、素朴な雰囲気を手軽に表現できる素材として注目していたのです。あの雰囲気は憧れて、特に、若いころにはよく使っていましたね。**木村** 確かに、当時の建築家にはかなり重宝されていた

「カラーベスト」を、非常に旺盛だった住宅需要を支えるための屋根材として、クボタは化粧スレートという素材に着目しました。米国のジョーンズ・マンビル社が1937年に開発した技術です。軽量かつ耐久性が高いという点に加え、湿式工法(漆喰)が必要な

2つ目は、ノイズレスでシャープなデザインを志向するようになったこと。先ほど、竹原さんから「カラーベスト」の素材感について前向きな評価をいただきましたが、シンプルなデザインとは対極。しかも、屋根の棟やげらば、外壁の場合は出隅部などに使用される役物は板金。化粧ス



2020年の「KMEW DESIGN AWARD」で最優秀賞(竹原賞)を受賞した「喜入の家Ⅲ」(上)と、同じく2019年に同賞を受賞した「インターバルハウス」(右)。「喜入の家Ⅲ」の外壁は「カラーベスト」の技術を活用してできた「SOLIDO typeM_LAP」の鉄黒とスギの下見板張り。経年変化がもたらす美しさを表現できる。「インターバルハウス」では、外壁に木目調の窯業系サイディング「エクスレージ・親水 14 木目調」(ケイミュー)を採用。建物を包む豊かな植栽のキャンパスとして機能している



「カラーベスト プレカットシステム」の導入事例。寄棟屋根では、隅棟部の形状が現場合わせになるため、従来は廃材が発生していたが、同システムを導入すれば、廃材を極力なくすることが可能。表面には番号が記入されているので、施工ミスも避けられる



「KMEW DESIGN AWARD」で竹原賞を受賞した「喜入の家Ⅲ」を設計した田川組 建築部 建築部長 一丁浩志氏(左)と、竹原氏の対談動画。現在公開中
視聴はこちらから



ROOFInnovation
日本の屋根をかえる

※3 石井修(1922～2007)は奈良県生まれの建築家。自然のままの地形を最大限に生かしながら、住空間と緑が共生する建築を目指した。主な作品に「目神山の家(回帰草庵)」(’76)、「シャルレ本社」(’83)、「鹿ノ台の家」(’94)などがあり、20軒を超す「目神山の一連住宅」は、86年度日本建築学会賞を受賞した
※4 「カラーベスト」発売60周年という節目に、ケイミューが社会に対して打ち出したスローガン(右)。「軽く強く」「長く美しく」「省施工」「廃材削減」という4つのコンセプトを提唱している
※5 図面に合わせて屋根材を切断するプレカットシステム。たとえば、屋根面積約30.5坪(寄棟)では、建築現場で発生する廃材を1棟当たり約180kg削減可能。省施工を後押しする

レートの大きな面に異素材が交じり合うと、それがノイズとして認識されてしまう。同じ軽量でも、金属屋根が好まれるのはこうした理由もあるでしょう。こうしたなかで開発したのが「グランネクストシンプル」(2020年)です。「LESS IS MORE」というキャッチフレーズが物語るように、無駄(装飾性)を一切排除した外装材であり、表面の模様やギザギザの水切部のないプレーンな化粧スレートです。役物の板金も目立たないように納められます。

つとしてない、というのは大手メーカー発の建材としてはかなり画期的な試みだと思います。このように、ケイミューさんは、時代の大きな変化のなかで、工業製品の可能性を常に追求していらっしやいます。別のアプローチでは、私も審査員として長らくかかわっている「KMEW DESIGN AWARD」がありますね。

木村 同賞は、2011年に「ケイミュー施工事例コンテスト」としてスタートしたものです。当社の製品を使った美しい外装の事例を世の中に提示することを目的としており、2020年で9回目を迎えました。竹原さんには2015年から審査委員長として参加していただいています。今回から竹原さんの提案で名称を「KMEW DESIGN AWARD」に変更しました。竹原さん、その意図はどんなものでしょうか？

竹原 単純な施工事例(写真)のコンテストとしては捉えられなくなってきたからです。建物(外装)の美しさのみではなく、その建物が地域の風土や街並みとどのような関係性をもっているか、という視点で応募作品に接するようになったのです。私の師である石井修先生^{※3}の教えでもあるのですが「建物は街並みの一部」。自然と、全国各地から応募される作品の奥に潜むそれぞれの風土や街並みを読み取るうとするのです。なので、名称の変更を提案しました。

2019年の最優秀賞(竹原賞)は、街並みへの配慮と植栽の豊かさが目を引く「インターバルハウス」(古谷デザイン建築設計事務所)。2020年は「喜入の家Ⅲ」(田川組)を選びました。こちらは、「SOLIDO typeM_LAP」とスギの羽目板を下見板張りで組み合わせたファサードが印象的でした。いずれも素朴な表情で、経年変化も楽しめ、建物が立地する鹿児島島の風土になじむ面構えになっていました。

木村 さて、カラーベストが誕生してから60年を経過するなかで、時代も大きく変化しています。大量生産&大量消費の社会は行き詰まりを迎え、日本は世界に先駆けて、人口減少社会&超高齢化社会に足を踏み入れています。当社としてもこうした社会の変化に対応すべく、日本の屋根を変え、現在の屋根を「ROOF Innovation」に取り組んでいます^{※4}。

屋根の下の耐久性を現在の30年から80年向上させる高耐久屋根構法「通気下地屋根構法」では、屋根の長寿命化が図れます。また、現場での廃材削減・省力化、輸送時CO₂排出量の削減に貢献する「カラーベストプレカットシステム」^{※5}は2020年度グッドデザイン賞を受賞しました。もちろん、「これからの時代に求められる建材とは何か」を追求することも不可欠。その理念とは、やはり、未永く愛される建材、建物の資産価値を長きにわたって高められる建材、でしょう。その1つの取り組みとして、「SOLIDO」は、古くなった屋根を金属